

2015年7月31日(木) 5校目

上演10

神奈川大学附属中・高等学校

恋文

第39回全国高等学校総合文化祭
第61回全国高等学校演劇大会

講評速報

生徒講評委員会 担当委員

宍戸 菜々恵 (岩手県立盛岡第三高等学校)

松下 夏実 (奈良市立一条高等学校)

中澤 伸之 (高知県立高知小津高等学校)

会場を何回も笑いの渦に巻き込み、心をわしづかみにした。登場人物たちのまっすぐで純粋な恋愛に思わず憧れてしまう様な作品であった。

主人公・環の元に差出人不明のメールが届く。その内容はなんと環に対する恋文であった。しかし、差出人はあと少しで引越してしまうと書かれていた。環はタイムリミットが迫る中、友人達と協力しながら差出人を見つけ出そうと奮闘する。可愛らしいポップな音楽が流れるのと同時に幕が開くと、そこには作中に登場する女子たちが現れる。ピンク色の照明が後ろから当たる中、全員が後ろ向きで環に当てた恋文の内容を読み始める。後ろ姿にした事によって、その恋文が誰から環に当てたものなのか分からず謎解きの世界へと導かれていた。

過去に父親を亡くしつつもそれを持ち前の明るさとまっすぐさで乗り越えた環。常に場を明るくさせるムードメーカーの陸奥。冷静だが恋愛に関しては少し勘違いをしてしまう舞木などの、アニメや漫画の中に出てきそうな個性的なキャラクターがこの物語には大勢存在し、こんな友達がほしいと感じさせる魅力があった。制服の着こなしの面でもカーディガンの色や巻き方、髪型など、一人一人のキャラクターらしさというものを視覚的に更に引き立てていた。そして、14人のキャラクター全てが個性的で魅力的に演じられており、登場するだけで、会話を一つ交わすだけで観客の笑いが起こるほどであった。

終盤で、昴の想いを知った環が昴に思いを告げるシーンがある。思わず見ているこちらが照れてしまいそんな直球の「…好きだ」「!…馬鹿っ…」という言葉を交わしながら、二人はぎゅっと抱きしめあう。戸惑いながら距離を縮めたり、昴が環のシャツの背中部分の握りしめたりする演技に現実ではありえないとは分かりつつもときめかずにはいられなかった。すべてを通して役者の表情や声のトーンの落差、動きのキレ、役に合わせた細やかな演技が素晴らしく、その人物の「好き」という感情が心の中に流れ込んでくるようであった。

物語の中で、教室、廊下、登場人物の家、昇降口、過去等様々な場面が登場する。その場所や時間の全てを照明で表していた。地面に映した青い照明は足元に流れる川を舞台前に表し、不良が登場するシーンでは真夜中の怪しい静けさを表していた。また、メールの差出人であった昴と環の歩く先から差し込む明るい照明がずっと二人の顔に当たった場面から、二人の明るい未来を象徴しているようにも感じた。

男女で受け止め方が異なったが「羨ましい」という声が思わずもれてしまったということは一致していた。甘酸っぱい夢のような物語であった。

